

手はほとんど生きた存在だ。召使だろうか。おそらくは。だがそれは、逆のような自由な才覚をもち、表情を宿している。眼もなければ声も持たないが、手は物を見て、語りかける。(…)人間の顔は、とりわけ幾つもの受容器官が組み合わせさって出来ているが、手は活動だ。それは掴み、作り出し、しばしばものすら考えているようだ。(…)口も利けず、目も見えない器官が、どうしてあれほどの説得力をもって語りかけるのだろうか？(…)私は手を体とも、精神とも切り離しはしない。だが手と精神との関係は、聞き分けの良い召使と、彼に傳かされた主人との関係などよりも、はるかに複雑だ。精神が手をつくり、手が精神を作る。創造しない仕草、その場限りの手振りは、意識の状態を挑発し、それに輪郭を与える。創造する動作、ものつくりの手わざは、内面の生命のうえに、引き続く作用を及ぼす。手は触覚から、その受身の受容性を奪い去る。手は触覚を、経験と行動へと組織する。ヒトは手から、延長ひろがり、重さ、密度、数を我がものとする術を学ぶ。前人未到の宇宙を創造しながら、手はそのいたるところに、己の刻印を残してゆく。手は素材を変身させ、形を変容させながら、その素材や形と自分を照らし合わせて、腕比べする。人間を訓育してくれる存在である手は、人間を時空のうちに増殖させてゆく。

アンリ・フォシオン「手を讃えて」(訳 稲賀繁美)

Henri Focillon, «Éloge de la main», in *Vie de Forme*,

Presses universitaires de France, 1943; 1970, pp.103-104; 128.